



花も紅葉もなかりけり

教養部助教授

奈古 忠國



中央図書館報「香散見草」が発刊されて1年経った。苗木も根を張り始めたようだ。生まれたものが少しずつ成長してゆく……。

広報課から連絡があった。

「香散見草も1年になります」

「ハイ」

「ついては、何か書いて戴けませんか」

「ハイハイ」

つつい引き受けて、しまったと思ってもあとの祭りである。

何を書けば良いのであろうか。爾後、結局花の夢を見るに至った。香散見草、すなわち梅を想っていたら、桜も浮かんできた。そして、思いは桜を詠み込んだ歌に行ってしまった。あれこれと思案の末、桜の歌一首について、おもうことをつれづれに陳べてゆくことにしたい。

※ ※

桜も梅同様に、時代を超えて今日まで受け継がれてきた。俳人、歌人、その他の先達の手によって創られた作品も夥しい。ときには、そこに強烈な情念が込められる。また、あるときには、その時どきの観念や思想なりが、それを借りて無意識的にさえ吐露された場合もあったであろう。

芭蕉が創り、西行が謳い、そして定家も詠んだ。江戸、室町、鎌倉、そして平安時代、いずれの時代においてもこの桜は重要な役割を果たしてきた。このような大きな流れのなか、平安朝末期、藤原定家は登場する。

西行が勧進した文治2年（1186）2月の二見浦百首の秋20首のなかに、定家の

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋の秋の夕暮

がある。のちに、寂蓮法師の「さびしさはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕暮」や、西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」とともに新古今和歌集に撰入され、三夕の歌と呼ばれるようになった。

この歌を巡って、古来諸説多い。北村季吟は「此浦の苫屋の秋夕を見渡せば、花も紅葉もなきに、いふよしもなき景気有といふ説有、又、此浦の苫屋の秋の夕の景には、花も紅葉もいらすと心の心云々、然共、始めの説感深しと師説也」（八代集抄）と述べ、本居宣長は「そもそも浦の苫屋の秋の夕べは、花も紅葉もなかるべきは、もとよりの事なれば、今さら、なかりけりと嘆ずべきにあらざるをや」（美濃の家づと）という。

今日も説多岐に互り、この歌の解釈は整理されていないようだ。先頃、この歌に触れ堀田善衛氏は「私には雅楽風の対位法の流れているシンセサイザーによる音楽のように聞え、かつ見える。上の句に、花と紅葉は、たとえ『なかりけり』と否定消去をされていても、一度言い出されたものは存在するのであり、花も紅葉もの、陽光のあたたかみのある残像は、否定消去をされていればこそ、なおさらに荒涼として何もない浦の苫屋（苫葺きの小屋）という基調低音を

もつ海景に重なって、二重像を形成する」(定家明月記私抄・1986年2月)と述べられている。

しかし、どうであろうか。はたして、この歌を「二重像を形成」した歌として処理をしてしまってもよいのであろうか。

十二世紀から十三世紀にかけて(平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて)生きた定家は、父俊成の寵愛を集めた。彼は文武両道に秀でていたが、とりわけその家柄と相俟ってか、その一生を歌道に没入させていった。歌道に取り憑かれた定家にとって、花(桜)や紅葉がいかなる存在であるか、十分に弁えていたはずだ。眺め、視つめ、考慮し、そして詠んでいった。それは飽くほどにまで見知った素材であったろう。だれもが称賛するであろう、季節を代表する桜や紅葉がいま眼の前には存在しない。何もない。苔茸きの粗末な小屋があるのみである。一体、定家はこの歌で何を謳おうとしたのであろうか……。あれほどに、ひとを一喜一憂させる桜や紅葉がないから寂しいといおうとしたのか。桜や紅葉がなくても、それ以上に眼前に広がるこの景観はすばらしいと視たのか。諸説紛々として解決を見ない。

この歌は、はたして意識下に理窟や骨組みが用意され、作成されたものであろうか。つまり、技巧がどうの、作歌姿勢がどうのというようなことではないように思われる。そうではなくして、もっと大きな流れの中で、ちょうど平安時代から鎌倉時代に転換してゆく潮のなかで、そっとこれらの言の葉が飛翔した。ほとんど無意識裡に眼前の風景が詠み挙げられた、とは考えられないだろうか。精神的に昇華してゆこうとするときの流れのなかで、淡々として「何もない」といった。粗末な苔茸きの小屋があるばかりである。当時の文化的なもの、物に対する考え方が定家の口を借りて出た。これは「無常観」などというものでもなく、また、「無」ということを敢えて意識して詠み込もうとしたのもなく、景観がそっとそのまま映像化された。

無の思想には、あらゆる有の世界のものが含有されているという。それこそ、自由な世界、豊かな世界が展開しているという。

桜や紅葉を知り尽くしていたからこそ、あるいはそれに捕らわれることなく、自由にそれを

謳いあげることができた。無の世界を憧憬してうたったのではなく、大きな無の波のなかに包含されていて、定家自身がおのずとその境地に立脚していた、とは考えられないだろうか。時代の精神＝定家の心境と一直線に結びつかないとしても、さほど遠くないところに定家はいた、と考えるのは僻事であろうか。この歌には、その時代の大きなうねりを彷彿とさせるような、静謐にしてのびやかな響きがあるように私には感じられてならないのである……。

※ ※

近ごろ、よく見聞きする豊饒、ほんとうの豊かさとは何をもって呼ぶのであろうか。日常生活のなかに、真の豊かさが垣間見られるのであれば、こんなに大騒ぎをする必要もないように思われるのだが……。

このような歌一首の解釈を試みることでさえ、少しく本を開き、あれこれ相違点を並べてみる。こういう営為は、とりもなおさず、己れの内面と対峙することになり、結果的に自らの精神のあり様を問うことになる。

求め求めて已むことを知らず、読んで考えてみるというひとの行為は、やはり精神的昂揚を希求してのことかも知れない。

そういった意味においても、多量の書物を抱える図書館は宝庫に違いない。本を開いたり、積み上げたり、視つめてみたりするのは、やはり真の豊かさに繋がる一方法であるように思われる。

